平成 28 年度 杉並区

特定の課題に対する調査、意識・実態調査

報告書

全ての子どもに

よりよい人生の基盤となる学力を確実に身に付けさせる

「つながり」と「生かし合い」の学習指導のために

平成 28 年 11 月

杉並区教育委員会 杉並区立済美教育センター

杉並区教科等教育推進委員会

平成 28 年度 杉並区

特定の課題に対する調査、意識・実態調査

報告書

全ての子どもに

よりよい人生の基盤となる学力を確実に身に付けさせる

「つながり」と「生かし合い」の学習指導のために

平成 28 年 11 月

杉並区教育委員会 杉並区立済美教育センター

杉並区教科等教育推進委員会

はじめに

杉並区立済美教育センター
所長　白石　高士

９月末に全国学力・学習状況調査の結果が文部科学省から公表され、それによると、下位県が全国平均に近付く状況がみられ、学力の底上げが図られていることが報道されました。これは、日本中の多くの学校において学力向上がみられたことを表す一つの結果であり、喜ばしいことであります。

学校教育とは、学習指導要領に示された内容を確実に子どもたちに理解させることを通して、知育・徳育・体育の調和のとれた人間を形成することであり、これはまさに教育基本法に定められた「教育の目的」に到達することと言えます。子どもたち一人一人のもつ能力を最大限に伸ばし、他人との関わりのなかで社会性を育てることを通して人格の完成を目指すとともに、国家及び社会の形成者として必要とされる心身ともに健康な国民の育成すること以外、教育が果たす役割はありません。特に義務教育においては、これからの豊かな人生を歩むための大切な基盤となることから、子どもたちが自立して社会で生きていくための資質・能力を確実に育んでいく必要があります。

本区においては、平成 16 年度から本区独自の学力調査を開始し、平成 23 年度から現在の「特定の課題に対する調査、意識・実態調査」へと発展させ、今年度からはそこに、小学校第４学年及び中学校第１学年における理科を追加してきました。そして、子どもたちの学習指導要領の実現状況を把握するため、各教科等の目標に対する達成度を５つの段階（R1～R5）に評価し、学校がつまずきや学び残しを中心に学習状況を捉え、その後の指導に生かしていくことができるように分析を行っております。これらの結果を生かし、昨年度から実施している「学力向上に関わる校内研修会」においては、自校の資料を基に、教員がその背景や原因について協議し、具体的な方策について考える場を設定してきました。子どもたちの様子を具体的に思い描きながらその指導について議論を行う姿が多く見られたことは、本研修の大きな成果であると言えます。

こうした様々な取組を通して、本年度の本区の平均正答率は、相対的にみれば全国や東京都をはるかに上回るだけでなく、上位と言われる秋田県や石川県、福井県等をも上回る結果となっております。特に今年度は、中学校第 3 学年において、平均正答率からみると高くはないものの、R3 以上の割合が非常に高い学校がみられたことは、中学校における学力の底上げがされた成果であり、今後も大きな期待がもてます。しかしながら、学校の個々の状況をみると必ずしもそうとは言えない実態もあり、今後も個に応じた丁寧な取組を進めていくことは言うまでもありません。

今年度末までには、新しい学習指導要領が示される予定です。本区の学校においては、小学校と中学校との意図的な接続を図り、様々な人や自然、社会とのかかわりを通して、基礎的・基本的な知識や技能を確実に習得させ、それを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、生涯を通して学び続ける意欲や態度を養うことが求められています。子どもたちが「何を学ぶか」だけでなく、「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」といった主体的・対話的で深い学びが実現するための指導を充実させるため、済美教育センターは学校を支援する機関として、学校と共に子どもたちに豊かな人生を送るための確固たる基盤を形成していきたいと考えております。

最後になりますが、本報告書は教科等教育推進委員会の多大なる協力をもって作成をしております。全ての委員の先生方に感謝を申し上げるとともに、本調査を十分に活用して、杉並区の子どもたちの学力が向上することを願っております。

平成 28 年 11 月

平成 28 年度 杉並区「特定の課題に対する調査、意識・実態調査」報告書

目　次

はじめに　　杉並区立済美教育センター所長　白石 高士
杉並区独自の学力等調査について、主な用語の解説

Ⅰ　調査の設計と概要

1　調査の設計に係る基本的な考え方　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
（1）調査の目的
（2）調査の対象・方式、内容
（3）学習指導要領に準拠した【系統性】の理解に基づく【連続性】を確保した設問
2　調査結果に基づく学習状況の評定と結果の取扱い・活用　・・・・・・・・　4
（1）学習指導要領に準拠した設問レベルに基づく学習状況の評定
（2）各学習状況の評定の趣旨
（3）結果の取扱いと活用
3　調査の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6
（1）調査期間
（2）調査対象・実施の児童・生徒、学校数
（3）各調査の設問数

Ⅱ　調査結果の概要

1　杉並区教育ビジョン 2012 に準拠した調査結果の経年　・・・・・・・・・　14
（1）「杉並区教育ビジョン 2012」と杉並区独自の学力等調査
（2）「杉並区教育ビジョン 2012 推進計画」の目標と結果分析・考察の留意点
（3）「杉並区教育ビジョン 2012 推進計画」の目標に準拠した調査結果の経年
2　国語科　特定の課題に対する調査　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　16
（1）５段階の学習状況の評定（学力段階）
（2）学習状況の評定（学力段階）ごとの平均正答率（教科全体）
（3）基礎・活用別、観点別、領域別の平均正答率（標準偏差）
3　算数・数学科　特定の課題に対する調査　・・・・・・・・・・・・・・・　18
（1）５段階の学習状況の評定（学力段階）
（2）学習状況の評定（学力段階）ごとの平均正答率（教科全体）
（3）基礎・活用別、観点別、領域別の平均正答率（標準偏差）
4　理科　特定の課題に対する調査　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　20
（1）５段階の学習状況の評定（学力段階）
（2）学習状況の評定（学力段階）ごとの平均正答率（教科全体）
（3）基礎・活用別、観点別、領域別の平均正答率（標準偏差）
5　外国語　特定の課題に対する調査　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　22
（1）５段階の学習状況の評定（学力段階）
（2）学習状況の評定（学力段階）ごとの平均正答率（教科等全体）
（3）基礎・活用別、観点別、領域別の平均正答率（標準偏差）
6　学習・生活についてのアンケート　意識・実態調査　・・・・・・・・・　24
（1）自己意識、生活実態に係る観点の平均値

Ⅲ－１　国語科　特定の課題に対する調査 教科等別結果の分析と考察

１【系統性】の理解に基づく【連続性】を確保した調査企画の全体像　・・・　26
２　結果の分析と考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　28
（1）５段階の学習状況の評定（学力段階）（再掲）
（2）学習状況の評定（学力段階）ごとの平均正答率（再掲）
（3）基礎・活用別、観点別、領域別の学力段階ごとの平均正答率
（4）領域別に抽出した設問の(準)通過率・無答率
３　各学年の結果と分析、考察と改善策　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　40
小学校第３学年から中学校第３学年
４　総括：次期学習指導要領を見据えた一貫性のある国語教育　・・・・・・　54

Ⅲ－２　算数・数学科　特定の課題に対する調査 教科等別結果の分析と考察

１【系統性】の理解に基づく【連続性】を確保した調査企画の全体像　・・・　56
２　結果の分析と考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　58
（1）５段階の学習状況の評定（学力段階）（再掲）
（2）学習状況の評定（学力段階）ごとの平均正答率（教科全体）（再掲）
（3）基礎・活用別、観点別、領域別の学力段階ごとの平均正答率
（4）領域別に抽出した設問の(準)通過率・無答率
３　各学年の結果と分析、考察と改善策　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　70
小学校第３学年から中学校第３学年
４　総括：次期学習指導要領を見据えた一貫性のある算数・数学教育　・・　84

Ⅲ－３　理科　特定の課題に対する調査 教科等別結果の分析と考察

１【系統性】の理解に基づく【連続性】を確保した調査企画の全体像　・・・　86
２　結果の分析と考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　88
（1）５段階の学習状況の評定（学力段階）（再掲）
（2）学習状況の評定（学力段階）ごとの平均正答率（教科全体）（再掲）
（3）基礎・活用別、観点別、領域別の学力段階ごとの平均正答率
（4）領域別に抽出した設問の(準)通過率・無答率
３　各学年の結果と分析、考察と改善策　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　100
小学校第４学年及び中学校第１学年
４　総括：次期学習指導要領を見据えた一貫性のある理科教育　・・・・・・　104

Ⅲ－４　外国語　特定の課題に対する調査 教科等別結果の分析と考察

１【系統性】の理解に基づく【連続性】を確保した調査企画の全体像　・・・　106
２　結果の分析と考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　108
（1）５段階の学習状況の評定（学力段階）（再掲）
（2）学習状況の評定（学力段階）ごとの平均正答率（教科等全体）（再掲）
（3）基礎・活用別、観点別、領域別の学力段階ごとの平均正答率
（4）領域別に抽出した設問の(準)通過率・無答率
３　各学年の結果と分析、考察と改善策　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　120
中学校第２学年及び第３学年
４　総括：次期学習指導要領を見据えた一貫性のある外国語教育　・・・・・・　124

Ⅳ　学習・生活についてのアンケート 意識・実態調査結果の分析

１　観点と質問項目の対応、結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　126
２　学習活動及びその【連続性】に関する質問項目の結果　・・・・・・・・・・　130
３　教科等と意識・実態のクロス集計の結果(抽出項目のみ掲載)　・・・・・　140

Ⅴ　資料

・平成28年度杉並区「特定の課題に対する調査、意識・実態調査」
　結果概要―中学校での「底上げ」進展、学力は「上昇」へ期待　・・・・　154
・調査用紙及び回答用紙、解答　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　156
・平成 28・27 年度 杉並区教科等教育推進委員会及び事務局　名簿　・・・・　212

編集後記　　杉並区立済美教育センター統括指導主事　大島　晃

杉並区独自の学力等調査について

1　調査の名称について

「特定の課題に対する調査、意識・実態調査」は、平成 16 年度から実施している杉並区独自の学力等調査である。平成 23 年度には、国、東京都が実施する学力等調査との対象学年の重複を避けるために方式を転換、小学校第 5・6 学年、中学校第 2・3 学年を各学校の希望利用とした。また、同年度、調査を質的にも転換し、本区に特有の課題を定める内容の比重を増すこととした。

現調査の名称は、上記に伴い、「学力調査、意識・実態調査」から改めたものである。「特定の課題に対する」とはすなわち、「特有の課題を定める」ことが本旨である。

2　特有の課題について

杉並区に特有の課題を定めるため、調査のうち「教科等に関する調査」は、全体の 65％程度を「基礎」、35％程度を「活用」に関する設問として企画されている（p.3）。基礎から活用までの課題をあまねく明らかにするため、例として平成 28 年度の東京都調査と比較すると、全設問に占める活用の割合が最大で 15％ほど高くなっている。

全ての児童・生徒に対し、義務教育期間の終了までに、人生の基盤となる学力について、基礎での学び残しやつまずきを解消し、活用する力のより一層の育成を目指す。こうした学校教育の目標に照らした際、どこに本区特有の課題があるのか。その詳細を明らかにし、課題の解決に資するため、本区調査は、以下に記す三点を特徴に備える。

3　調査の特徴について

（1）内容の特徴

「教科等に関する調査」は、義務教育期間を通じた多様で一貫性のある教育の充実に資するため、【系統性】の理解に基づく【連続性】を確保した内容として企画されている（p.26, 56, 86, 106）。「意識・実態調査」は、とりわけ「杉並区教育ビジョン 2012」が掲げる「目指す人間像」を踏まえ、自己効力感や相互承認の感度、集合的効力感、学びの個別化／協同化／課題探究化などを軸に構成されている（p.10, 11）。

（2）結果提供の特徴

結果は、第一に、学習指導要領の実現状況を示す「学力段階」（p.4）に処理される。系統的・連続的な調査の企画により、最大 7 学年を経年で追うことができる。また、全ての教員が、学年や学級、何より一人一人の児童・生徒の状況を簡便且つ直観的に把握できるよう、結果を「学力分布」や「クロスバブルチャート」（p.5）に処理、校務 PC 上で各軸にプロットする教科等や意識・実態調査項目を操作可能にして提供している。

（3）結果活用の特徴

調査は、活用してこそ価値がある。調査をコミュニケーションツール（p.4）として例えば学校と教育行政が協働するため、平成 26 年度に全校悉皆・集合型の報告会を廃止、代替として全区立小・中学校が個別に報告（研修）会を実施する。済美教育センターは講師派遣や資料作成に応じ、平成 28 年度は 7 割強の学校から要請を受けた。

主な用語の解説

<table>
<tr><th>用語</th><th colspan="4">解説</th></tr>
<tr><td>学習指導内容の領域</td><td colspan="4">学習指導要領における各教科等の学習指導の内容の領域のこと</td></tr>
<tr><td>学習評価の観点</td><td colspan="4">観点別学習状況評価における評価の観点のこと</td></tr>
<tr><td rowspan="5">設問レベル
(S～C)

※詳細は p.3,4</td><td colspan="4">調査実施の前学年の学習指導要領・当該教科等における目標・内容(事項)に準拠した設問の難易度であり、4段階に分類される。
・基礎 C・B は、「基礎的・基本的な知識及び技能」を趣旨とし、全児童・生徒に、義務教育9年間を通じ、確実に習得させる(＝(準)通過率100%を目指す)内容の設問
・活用 A・S は、「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他能力」を趣旨とし、全児童・生徒により一層の育成を目指す内容の設問</td></tr>
<tr><td rowspan="2">活用</td><td>活用 S</td><td colspan="2">「自ら活用する能力」に関する設問</td></tr>
<tr><td>活用 A</td><td colspan="2">「思考力・判断力・表現力」に関する設問</td></tr>
<tr><td rowspan="2">基礎</td><td>基礎 B</td><td colspan="2">主に「基礎的・基本的な技能」に関する設問</td></tr>
<tr><td>基礎 C</td><td colspan="2">主に「基礎的・基本的な知識」に関する設問</td></tr>
<tr><td rowspan="6">学習状況の評定
／学力段階

※詳細は p.3,4</td><td colspan="4">調査結果を基に評価(評定)した調査実施の前学年の学習指導要領の実現状況＝目標に準拠した段階評価の結果であり、3段階にも概括できる。</td></tr>
<tr><td>R5</td><td colspan="2">「発展的な力が身に付いている」状況／段階</td><td rowspan="2">3</td></tr>
<tr><td>R4</td><td colspan="2">「十分定着がみられる」状況／段階</td></tr>
<tr><td>R3</td><td colspan="2">「おおむね定着がみられる」状況／段階(最低限の到達目標)</td><td>2</td></tr>
<tr><td>R2</td><td colspan="2">「特定の内容でつまずきがある」状況／段階</td><td rowspan="2">1</td></tr>
<tr><td>R1</td><td colspan="2">「学び残しが多い」状況／段階</td></tr>
<tr><td>通過
(正答)</td><td>当該設問の趣旨に対し「満足できる」解答であった場合、その児童・生徒は設問を「通過」とする。</td><td rowspan="3">電子データ上の記載
・通過　＝ ◎
・準通過 ＝ ○
・未通過 ＝ ×
解答用紙上の採点
・通過　＝ ○
・準通過 ＝ △
・未通過 ＝ ✓</td><td rowspan="4">個人ごとの指標</td></tr>
<tr><td>準通過
(準正答)</td><td>当該設問の趣旨に対し「おおむね満足できる」解答であった場合、その児童・生徒は設問を「準通過」したとする。</td></tr>
<tr><td>未通過
(誤答)</td><td>当該設問の趣旨に対し「努力を要する」解答であった場合、その児童・生徒は設問を「未通過」とする。</td></tr>
<tr><td>正答率</td><td colspan="2">全設問に占める通過及び準通過した設問の合計割合</td></tr>
<tr><td>(準)通過率</td><td colspan="3">当該集団において、当該設問を(準)通過した児童・生徒の割合
特に断りなく「通過率」という場合は、準通過を含めた率</td><td rowspan="5">集団ごとの指標</td></tr>
<tr><td>平均正答率</td><td colspan="3">正答率を当該集団において平均した値</td></tr>
<tr><td>中央値</td><td colspan="3">当該集団の正答率を順に並べた際に中央に位置する値。集団の人数が偶数の場合は、中央2人の平均値を中央値とする。</td></tr>
<tr><td>標準偏差</td><td colspan="3">個々の値と当該集団の平均値からの離れ具合(距離)から算出される、当該集団のデータの散らばりの度合いを表す値。当該集団において全データが同値の場合、標準偏差は0となる。</td></tr>
<tr><td>肯定率</td><td colspan="3">当該集団における肯定的な回答をした児童・生徒の割合</td></tr>
</table>